

第4回アジア養蜂研究協会 大会に参加して

北岡 茂男・藤原 瑞永

ミツバチとの付き合いと 第4回AAA大会の印象

1972年、キャンベラで開催された第14回国際昆虫学会が最初として、昆虫、ダニ関連の国際学会には約10回、発表のため参加したが、養蜂に関する国際大会への出席は今回が初めてで、創刊以降の「ミツバチ科学」の愛読者であったものの、ミツバチとの接触から離れ約30年にもなっている。今回、ツアー旅行の気安さから、分蜂の様に急に思い立ち、1966年、FAOの専門家としてテヘランへの機上から見たヒマラヤの白い峰々を再び見るため、学会は従にして参加したのが本音である。

1952年に勤務を始めた農水省家畜衛生試験場では、寄生虫研究室で牛、馬などの病気を媒介する吸血性のマダニやヌカカについての研究に従事した。意外にも、ミツバチは研究対象の家畜で、その頃、流行が見られかけた腐蛆病の原因につき、細菌研究室で菌の分離と感染試験が試みられていた。しかし不思議なことに実験感染が成立せず結論が出せない状況にあった。ミツバチは昆虫ということで鉢が回ってきて、養

蜂学のイロハを畜産試験場の徳田義信先生や、玉川大学の岡田一次先生に習い、約20蜂群を飼育してアメリカ腐蛆病菌の芽胞の定量的感染力を明らかにし、英文報告(1959)としてまとめた。結果は外国の成書にもしばしば引用された。その後、ミツバチヘギイタダニの仮称(1968)を提案し、ダニの加害性の大きさを警告したが、十数年にわたるミツバチとの付き合いも、蜂毒アレルギーを起こすようになり、離れざるをえなかった。世界の養蜂業の大部分はセイヨウミツバチで行われていたため、ニホンミツバチの細菌、ダニなどに対する感受性についてはまったく知られていなかった。そこで養蜂新聞の深沢氏の好意で松本市郊外で飼育中のニホンミツバチを入手し、持ち帰り、巣門を開けた瞬間、飛び去ってしまう喜劇を演じさせられた。

玉川大学ミツバチ科学研究施設を中心としたアジア各国の養蜂学の高まりは、4回のAAAの大会でアジア固有ミツバチ種への知見の増加と、それらの養蜂利用化の努力が注目された。今回の学会の最初の報告はネパールの1500mと2600m地点で、4タイプの巣箱内の温度を比較調査したところ、近代式が最も劣り、稲わら藁式が優れていることを述べた。学会展示会室ではICIMODの婦人たちが稲わら藁式巣箱の製作を実演していた(図1)。大会に対する私達夫婦の印象はICIMODのペリンク所長の閉会挨拶内容によりよく要約できるものと思われる。すなわち、ヒンドゥックシヒマラヤ山地における持続可能な総合的農業開発において、養蜂の利用と、そのための婦人の積極的参加が大きな力を発揮している。ドゥリケルの一篤農家



図1 展示会での稲わら式単箱の製作実験



図2 ドゥリケルの養蜂家と

は、意欲的に種類の果樹を急斜面の棚畑に植え、また巣ひ式のトウヨウミツバチを飼い、熱心に管理する姿に大きな感銘を受けた (図2)。

(〒945-1102 柏崎市向陽町 1279-215 北岡)

ミツバチとゾウと

今回第4回アジア養蜂研究会大会に参加することになり、海外経験のない私は大きな期待とその反面の不安をいだきながら3月17日成田空港へと向かった。6時間ほどでバンコクに到着し1日目はバンコクで1泊した。タイが私にとって初めて体験した海外ということになったのだが、大変近代的な都市で「日本と何ら変わらない」これが私の第一印象であった。

2日目いよいよ会議の行われるネパールへと到着した。ホテルに着いてすぐ私は市内観光へとでかけたが、40年前の日本はこんな感じであったのだろうかと思うほどの驚きを覚えた。まず車が古いため排気ガスがすごく2~3日は目と喉の痛みが消えなかった。また街を歩いていると、子供や大人がギターやポストカードを買ってくれと話し掛けてくる、この時初めて海外に来たのだという実感が沸きとんでもない所に来てしまったと想ったと同時にこの国の人々の生きるエネルギーの様なものを感じた。

4~6日目にかけてオオミツバチを見るツアーに参加した。一本の木に5~10のコロニーが群がっている光景には感動し、長時間バスに揺られた疲れを忘れ参加者のほとんどがすぐホテルを出てその木をじっと眺めていた。その日の夜にはハニーハンティングのデモンストレーションも行われ、その取り方が火で蜂を追いだし、そのすきに巣ごと取ってしまうという古典的かつ大胆な方法であった。このツアーのもう一つの目玉はゾウにのってジャングルの動物たちを見学するというもので考えただけでわくわくした。実際ゾウに乗ると想像以上に視界がよく、また揺れが激しいがその揺れもそのうちなれ、約2時間の散歩中に大自然を満喫すると共にサイ、ワニ、など日本国内では動物園でしかお目にかかることのできない生き物を自然の状態で見学することができ私を乗せてくれたゾウ



図3 ゾウに乗ってジャングルに向う

にはしばらくたった今でも感謝の気持ちでいっぱいである (図3)。

8~11日目今回の旅のメインである学会が行われた。会場はここがネパールかと目を疑うほど立派な建物で、盛大に開会式が行なわれいよいよ学会がスタートした。私の主な仕事は絵葉書と切手の販売であった。他のブースをみると蜂蜜や薬であんだ巣箱など様々の養蜂器具が売られており大変活気にあふれていた。仕事の合間には養蜂界の第一線で活躍する諸外国の研究者のスライド発表やポスターを見学した。共通語が英語のため私には聞き取りにくいところが多くあったが一緒にいた新島先生が横でわからない所は何をいっているのかを教えてください非常にありがたく感じた。また初日の午後に行われた佐々木先生の発表では私が行なった実験についても発表してくださり、この15分間は、1年間の苦勞、研究室での思い出などが頭をよぎり卒業式にしているような気持ちで聞いていた。この3日間で英語にも多少自信がつきどんな英語でも一生懸命聞こうとしてくれる姿には大変感動した。最終日の夜パーティーが行なわれ、学会中に知り合った仲間達との再会を約束して慌ただしかった3日間は無事終了した。

すべての日程が終了し日本へ帰るとき、言葉の通じない海外へ行くのに抵抗を持っていた私がまた海外へ行ってみたいと考えるようになっていた。アジア養蜂研究大会への参加は自分の将来への勉強になったと同時に、世界の広さを肌で感じた14日間であった。この旅は私の一生の宝物となるだろう。(〒019-1613 仙北郡大田町字金井伝山下 55 ㈲天然園 藤原)